CIVIL WARS
A History in Ideas

by David Armitage

Copyright © 2016 by David Armitage
All rights reserved

First published 2016 by Alfred A. Knopf, New York.
This Japanese edition published 2019
by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo
by arrangement with The Wylie Agency (UK) Ltd, London.

ニコラス・ヘンシャル（一九四四―二〇一五年）
クリストファー・ベイリ（一九四五―二〇一五年）
を追悼して

内戦？　それはいったい何の意味であるか。外戦というものが存在するか。すべて人間間のあらゆる戦争は、皆同胞間の戦いではないか。

――ヴィクトール・ユゴー『レ・ミゼラブル』（一八六二年）

どんなに人間が互いに兄弟たりえようとも、それは兄弟殺しから成長してきたものであり、どんな政治組織を人間がつくりあげてきたにせよ、それは犯罪に起源をもっているのである。

――ハンナ・アーレント『革命について』（一九六三年）

# 目　次

凡　例

序章　内戦との対峙　1

**第一部　ローマからの道**……25

第一章　内戦の発明――ローマの伝統　27

第二章　内戦の記憶――ローマ人の描く心象　53

**第二部　初期近代の岐路**……83

第三章　野蛮な内戦（アンシヴィル）――一七世紀　85

第四章　革命の時代の内戦――一八世紀　111

**第三部　今日への道** …… 145

第五章　内戦の文明化――一九世紀 147

第六章　内戦の世界――二〇世紀 179

結論　言葉の内戦 213

あとがき 221

解題（成田龍一） 229

訳者あとがき 247

参考文献一覧 45

注 12

索引 1

# 凡　例

一、［　］は原注、〔　〕は訳注を示している。
一、必要に応じてルビ、原語を入れた。
一、原文のイタリックには傍点を付した。
一、注に引用されている原文は一部を除き省略した。

# 序章　内戦との対峙

一九四五年以来、ヨーロッパ、北アメリカ、それにオーストラリア、日本といった比較的裕福な国々は、「長い平和」と呼ばれる時代を経験している。第二次世界大戦後に到来した、国家間の戦争のないこの時期は、今や近現代史の中でも一番長く続いている。少なくともヨーロッパ内で、かつてもっとも穏やかだった時期といえば、ナポレオン戦争の終結からクリミア戦争までの期間（一八一五―五三年）、次いで一八七一年の普仏戦争の終結から一九一四年の第一次世界大戦の開戦までのおよそ四〇年間であった。しかし、グローバル・ノース（北の先進諸国）における最近の国際平和は、その大半の時期は冷戦の影が重くのしかかっていたとはいえ、すでにそうした過去の平和な時期よりも二〇年以上長くなっているのである。[1] 近年のグローバルな傾向によりさらに長くなりそうである。データのあるところで、直近の二〇一六年でいえば、国家間の戦争はインドとパキスタン、エリトリアとエチオピアの間で行われた二回きりであり、いずれも国境紛争だった。後者が行われたのはわずか二日間だった。[2] ロシアによるウクライナへの干渉、南シナ海の諸島をめぐって過熱する紛争にもかかわらず、長い平和は拡大し地球全体を覆うかのような状況を見せている。

とはいえ、われわれの時代も決して太平の世とは言えない。世界はいまだにきわめて暴力的な場所であることも確かである。[3] 二〇一六年には、アフガニスタンからイエメンまでの至る所で、四九件の武力紛争

が進行していた。これには、テロ行為、騒擾（そうじょう）、あるいはこれ以外の形態をとる「非対称」戦争（そこでは非国家勢力が国家やその住民を攻撃する）は含まれていない。当初はアルカイダ、今やイスラーム国（ダーイシュ）とその支持者の活動によって、マンハッタンからムンバイ、シドニーからブリュッセルに至る世界中の市街地に戦争のための兵器が持ち込まれた。国家間こそ互いに平和を保っていても、その住民たちは遠くで起きている紛争（しかし、多くの住民はそれが自分たちの領域内の戦争であることを分かっている）の影響を受けており、とうてい気が休まらず安全とも感じていないのである。長い平和はいまだに暗い影――内戦の影――を引きずっている。

一九九〇年代初頭に、「歴史の終わり」の理論家たちは、資本主義と民主主義が地球全体に行き渡り、貿易の繁栄や確保された諸権利を享受する全ての人々を結びつけることになるだろうと確信を持って述べていた。こうした思想の信奉者たちはいわゆる民主主義的平和を主張した。（彼らが言うには）民主政体は互いに戦争を始めたりはしないから、民主主義が広まるにつれて、普遍的な平和もそれに続いて広まる、という見解である。それは哲学者イマニュエル・カント（一七二四―一八〇四年）の議論に基づいている。カントも永遠平和を確保する可能性をめぐって、長い伝統を持つヨーロッパの啓蒙思想の言説に依拠していた。[4] カントは決して世間知らずだったわけではなかった。彼は風刺を効かせて、オランダの宿屋には、墓場を描いた看板の絵と並んで、まさしく「永遠平和のために」の文言が書かれていた、と述べた。それは、唯一の真に永続的な平和は死という永遠の眠りであることを意味したのである。とはいえ、カントは国家間の平和は「けっして空虚な考えではなく」「しだいに実現され、つねにその目標に近づいていく課題に他ならない」と信じていた。[5] 彼の存命中に永遠平和に少しでも近づいたわけではない。カントは一八

〇四年二月に亡くなるのだが、そのわずか一〇カ月後に、偉大な将軍にして帝国建設者であるナポレオンが皇帝となり、以後一〇年余りにわたって世界を震撼させるのである。そうであっても、それから二〇〇年余りが過ぎて、ついに国家間の武力紛争を乗り越えたかもしれないと、信じたがるものも多い。「われわれの本性の善なる天使」に従い、われわれはカントの夢を実現し、ついに「戦争をめぐる戦争に勝つ」ことができるだろう、と。[6] だが、われわれの周囲は死と破壊にあふれており、われわれが手にしている平和は、むしろ墓場の平和にも似ている。そして、近年、他のいかなる紛争にも増して墓場にあふれかえっている紛争は、国家間の戦争とかテロ行為などではなく、何よりも内戦なのである。

内戦は、もっとも広範囲に及び、もっとも破壊的で、もっとも特異な組織的対人暴力となっていった。冷戦終結後の数十年間には内戦が急増している。一九八九年以来、国家内の戦争が年に平均して二〇回起きている。これは、一八一六年から一九八九年までの年平均の約一〇倍である。一九四五年以後のこうした戦争における「戦死者の総数」は約二五〇〇万人であり、これは第二次世界大戦中の戦死者のおよそ半分である。これには、病人や栄養失調者はもちろんのこと、負傷者、難民、民間人の死者も含まれない。人的損失に劣らず甚大だったのは、物質的経済的な損失だった。グローバルな発展を冷徹に分析する者たちは、浪費された資源の価値、軍事費、犯罪や疾病の蔓延、近隣経済に与える混乱などとともに、生命、ひいては生産性の喪失を考慮に入れながら、戦争が成長に与える影響に注目してきた。その分析結果はどうだったろうか。内戦の代償は一年につきおよそ一二三〇億ドルであり、これはおよそグローバル・ノースによるグローバル・サウス〔南の発展途上国〕への経済援助の年間予算額である。したがって、内戦が「後ろ向きの発展」と冷ややかに書かれてきたのも無理はない。[7]

国家内の戦争は、国家間の戦争よりも――およそ四倍ほど――長期化する傾向があり、二〇世紀の後半には総じて二〇世紀前半の三倍ほど長く続いた。こうした紛争はまた他の紛争よりもはるかに再発しやすい。というのも「内戦のもっともありそうな遺産はさらなる内戦だ」からである。実際この一〇年間のほぼ全ての内戦は、以前の紛争が再発したものである。[8] 内戦は、開発経済学者のサー・ポール・コリアーが「底辺の一〇億」と呼んだ世界の最貧国――特にアフリカやアジアの――に偏って起こるようである。[9] 先進各国は一九四五年以後長い平和を享受してきたにしても、全世界の人々の大半は、それと同じくらい長い間、トラウマを経験してきた。オスロの内戦研究センターはそのウェブサイトでこうした特徴を列挙して、こう付け加えている。「とはいえ内戦は国家間の戦争ほど研究されていない。[10]」内戦は、貧民に似て、常にわれわれとともにあるようだ。そしてそうである限り、内戦はおしなべて世界の貧民を苦しめることになるのである。

しかし、内戦は探求がなされないままであってはならない。よく言われるように、内戦は理論化が遅れていて、一般化も難しかった。カール・フォン・クラウゼヴィッツの『戦争論』やハンナ・アーレントの『革命について』に並び立つような『内戦論』と題した名著は存在しない。実際あとで触れるように、クラウゼヴィッツは内戦についてまったく論じていない。一方、アーレントは戦争そのものと同様、内戦も隔世遺伝的で反近代的なものと斥けていた。戦後ドイツの詩人にして政治評論家のハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー（一九二九年生まれ）は、一九九三年に「内戦の理論として使いものになる理論は今日まで、一つもないのが実状なのだ」と述べた。[11] つい最近、イタリアの政治理論家ジョルジョ・アガンベン（一九四二年生まれ）は「今日、戦争理論にあたる「戦争学（ポレモロジー）」もあれば、平和理論にあたる「平和学（イレノロジー）」もある

が、内戦理論にあたる「内戦学（スタシオロジー）」は存在していない」と書いた。[12] こうした嘆きを長いこと耳にしてきた。ただ内戦の包括的な理論を提供することが私の目的ではない。その不足を埋め合わせる論文を上梓することでもない。歴史家として私がなしうることは、こうしたわれわれがいま抱える嘆きや不足感の原因を探り当てること、そして、いったいなぜわれわれは内戦についてこれほど混乱したままなのか、なぜ正面から向かい合おうとしないのか、を説明することである。

われわれの時代は、内戦に毅然と立ち向かうことを求めている。一六四八年から一九四五年までの三〇〇年間は、国家間の戦争の時代だった。最近の六〇年間は国家内の戦争の時代のように見える。[13] 実際、これが数世紀にわたる対人紛争のパターンにおけるもっとも顕著な変化である。よく引用されるある推計によると、一九四五年以後、戦争のレヴェルまで達した紛争は世界各地に二五九件あり、そのうちの圧倒的多数は国内紛争であった。一九八九年以来、世界の戦争のうち、国家間で行われたのはわずか五％にすぎなかった。一九九〇年代のバルカン諸国の戦争、ないし、例えばルワンダ、ブルンジ、モザンビーク、ソマリア、ニカラグア、スリランカにおける戦争まで遡って考えてみるだけでも、こうした国内紛争が最近の記憶に強烈にいかに決定的に残っているか、またその後に生き延びた人々が引き継いだ苦しみがいかなるものかが分かるだろう。問題をさらに難しくしているのは、内戦が通常、それほど長く「国内（シヴィル）」に留まっていないことである。二〇一六年に、アフガニスタンからイエメンまでの四七件の国内紛争のうちの一八件までが、いわゆる国際化された内戦であった。これらは近隣諸国の諸勢力や外部の大国からの干渉を招いた。[14] 内戦は国境のことなど考慮しない。実際、内戦はしばしば国を転覆させる。人々が紛争によって追われ、安全を求めて故国を去るからである。内戦によって追い立てられた住民――特に二〇一二年以降

のシリアでの一連の紛争の間に出た、当地からの難民はおよそ五〇〇万人を下らない――は、こうした流出のもっとも顕著な犠牲者である。彼らの惨状が難民危機を刺激し、その危機は何世代にもわたって中東、北アフリカ、ヨーロッパを再編しつつある。これに伴い安全や安定が揺るがされるために、われわれの世界は平和だとは言えなくなっている。われわれは内戦の世界にいるのである。

*

「戦争は地獄である」と語ったのはアメリカ南北戦争の将軍ウィリアム・テカムセ・シャーマンだとされる。しかし、これよりも悪いのは、ただ一つ――内戦である。[15] この事実については、幾世紀にもわたって広く意見が一致している。国内の戦争は外敵に対する戦争よりも破壊的になると考えられている。紀元前一世紀のローマの内戦の後に著作活動をした詩人ルカヌスは、壊滅した都という都、荒れ果てた田地、難民の群れから以下のような結論を下した。「これほど深く刃を突き立てることは、どんな外国人にもできなかったのだ。／深く抉られて残るその傷は、骨肉相食む内戦の手のしからしめた業」。内戦はさながら、内部から蝕んでいく政治的身体の病である。ルネサンス期の随筆家ミシェル・ド・モンテーニュならば、フランスの宗教戦争〔ユグノー戦争、一五六二―九八年〕の間に読者に「たしかに、外国との戦争は、内戦と比較すれば、はるかにおだやかな病気だといえる」と同じように警告していただろう。内戦は危険にしてかつ道徳的にも堕落していた。一九二二年のアイルランド内戦の直前に、高齢の聖職者は「外国人との戦争は、国家の最良にしてもっとも高貴なものをことごとく表面化させる――それにひき換え、内戦は卑怯で卑劣なものをことごとくひきつける」と嘆いた。[16] 戦闘が終わってからも癒やしがたい傷を残す。「深刻

な内戦のうち、終わりを迎えられたものはあるのだろうか、疑問に思います」と、T・S・エリオットは一九四七年に記した。[17] 一九七〇年にスペインを訪問した前大統領シャルル・ド・ゴールもこれを認めていた。「全ての戦争は悪い……しかし、相戦う両者の塹壕に同胞がいる内戦は、許しがたい。なぜならば、戦争が終わっても平和がやってこないからである」[18]と。

内戦は間違いなく非人間的であるが、あまりに拡散しかつ永続しているので、われわれの人間性に本質的に備わるものではないか、と思うものもいる。エンツェンスベルガーが論じているように、「動物たちは闘争はするけれども、戦争をすることはない。人間だけが――霊長類の中でも特殊なことに――、自身の同類を計画的に、大規模に、かつ熱狂的に殺戮する」のである。身近な隣人に攻撃を加えることほど、きわめて人間的でありながら、他の動物の習性とはひどく異なることがあるだろうか。職業軍人によって遂行され、戦争法によって制限される公式の戦争は、近代的で最近のものだったが、この外見の裏に潜むものは、より基本的で永続する、非人間性の形態、すなわち内戦である。「内戦というものは、単に古い慣習の一つではない。内戦こそが、あらゆる集団的な抗争の、原初形態なのだろう」というのがエンツェンスベルガーの結論である。[19]

エンツェンスベルガーがそう記したのは、アフリカやバルカン諸国の民族紛争の余波が続く時代であり、それは、一九九一年に〔合衆国で〕アフリカ系アメリカ人の運転手を殴った警察官に無罪判決が出て、翌一九九二年四月から五月のロサンゼルス暴動があってから間もない頃でもあった。この時はちょうど人間同士でふるわれる暴力が、あたかも、人類の持つ最悪な部分を再び蔓延させるかのごとく、また市民戦士としてのわれわれの運命を確認するかのごとく、また大陸を越えて、かつ都市の内部にまで浸透して、世界

中でその頂点に達したように感じられた時であった。エンツェンスベルガーが、内戦が常にわれわれとともにあったと仮定しても仕方がないだろう。世界の神話のかくも多く――『マハーバーラタ』におけるクリシュナとアルジュナ、ヘブライ語聖書のカインとアベル、ギリシア神話におけるエテオクレスとポリュネイケス、ローマ人にとってのロムルスとレムス――では、殺し合いの暴力、特に兄弟殺しの暴力がその基本になっていることを示すかのように、この暴力に関心が払われている。[20] このような神話は紛争の感情的な次元を捉えるには役に立つかもしれないが、その永続性は内戦の必然性と誤解されてはならない。

内戦とはあらゆる対人紛争の中でももっとも破壊的で侵略的なものであるとも、長らく言われてきた。それにはまっとうな理由がある。紀元前一世紀におけるローマ内戦の最盛期には、一七歳から四五歳までの男子全市民の恐らく四分の一が兵役についていた。[21] それから一七〇〇年経った一六四〇年代の内戦で亡くなった犠牲者のイングランド全人口に占める比率は、第一次世界大戦の戦死者の比率よりも恐らく高かった。[22] アメリカ南北戦争の死亡者数は、第二次世界大戦におけるアメリカ人戦死者よりも人口比ではかなり高かった。すなわち、前者は南北合わせて七五万人と推計され、これは今日のアメリカ合衆国の人口でいえばおよそ七五〇万人の死者が出たことになる。[23] このような大規模な殺戮によって家族は引き裂かれ、共同体は分断されて、国家が形作られる。この殺戮は、その後の数世紀にわたる記憶にも傷跡を残すことになる。

とはいっても、内戦は、われわれ人間社会に不可欠なもの――われわれを人間たらしめているソフトウェアの特質であって不具合（バグ）ではない――なのだと決めてかかることには慎重でなくてはならない。というのも、そのように仮定してしまっては、われわれは永久に内戦に苦しむ運命となり、カントが約束

した永遠平和には決して到達しないからである。永遠平和に到達するよりも永久に内戦に苦しめられる定めにあるのだとする見方を打破するために、私は、歴史という道具を使って、内戦という課題に挑んでみようと思う。本書の全体を通じて、私が示したいのは、内戦が恒久的でもなく不可解なものでもないことである。私が論じるのは、この現象が歴史的概念と並走していること、つまり共和政期ローマの恐るべき起源から、論争の的となっている現代、そして変わらず物議をかもしているだろう未来へと辿れるものだ、ということだ。それには、終わりこそいまだ見えずとも、始まりを特定できる歴史がある。歴史を探求していくと、内戦が状況に左右されてきたことが明らかとなり、内戦の恒久性や持続性を想定している人々を反駁できるのである。私は、人間が発明したものは人間が解体もできること、また、知的な意志によって祭り上げられてきたものも、同様に創意に富む意志を働かせて祭壇から引きずり下ろせるものだということを示したい。

私の目的は、内戦の歴史を掘り起こすに留まらず、われわれの世界観を作り上げる上で内戦が持つ意義を強調することでもある。内戦は、その破壊性にもかかわらず、歴史を通じて、多くの概念を生み出してくれた、と言えるだろう。少し挙げるだけでも、民主主義、政治、権威、革命、国際法、世界市民主義、人道主義、グローバル化といった概念は、内戦が突きつけた挑戦なくしては、かなり違ったものどころか、かなり貧弱なものにさえなっていただろう[24]。また、内戦の経験――内戦を理解し、緩和し、阻止しさえする努力――によって、今日までの共同体、権威、主権をめぐるわれわれの考え方が形成されてきたし、考え方への着想も与えられ続けているのである。内戦は深くて和解の余地のない分断から生じるが、内戦によって自分たちの帰属意識や共通の属性がえぐり出されたりする。ある戦争を「内戦」と呼ぶことは、敵

を同じ共同体の構成員――外国人ではなく同胞市民である――と見なす親近性を認めることである。ドイツの法思想家カール・シュミット（一八八八―一九八五年）は以下のように述べた。「内戦には独特の陰惨さがある。それは骨肉間の闘争である。なぜなら敵をも包摂する共通の政治的単位内の闘争であり、両陣営ともに共通の統一体に対して同時に絶対的肯定と絶対的否定をもって臨むからである」[25]。これがわれわれが内戦に恐怖を抱く源泉である。内戦にあっては、敵対しつつも同胞であることを互いに認めあうこと――敵対する相手を映す鏡にこちら側も映し出すこと――が持っている意味を軽んじてはならないのである。

内戦の定義は、万人を満足させたり、疑問や論争なしに使われたりしたことは一度もなかった。そのために逆説的ながら、かえって豊かな研究成果をもたらした。これは内戦の概念がこれほど多くの異なる歴史的背景の中で議論されてきたためでもある。とはいえ、命名するということは一つの枠に当てはめることになる。ある対象を理解することは、まずは類似するものからそれを区別することであり、このことは、この対象を言葉で飼い慣らすことによって、それはいったい何なのかを必然的に確定していくことになる。次いで、どのような点が特異なのかが分かれば、そのありよう、継続性、差異性も分かり始めるようになり、ひいては理解も深まっていくのである。

この命名の問題は、政治思想がかかわっている場合にはとりわけ深刻である。われわれは、味方を説得し、敵を倒すためにこうした言葉を考案する。新しい事態が起こった場合、「私たちは何をしているのか」とその事態を理解すると同時に、相手側にもこちら側の理解を共有してもらうために、新しい言葉を作り出さなければならないのである。けれども、それが「内戦」といった言葉だとしたら、あれこれ定義を考